

サルえもん短編集

サルえもん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界は無数に存在する。これはその中のほんの一部を記したものである…。

長編の息抜きとして短編集を書くことにしました。これからよろしくお願ひします。

10月8日追記：しばらくはこつちがメインになりそうですので今後ともよろしくお
願いします。

元ネタ集：GS美神、東方Project、聖闘士星矢、ドラえもんズ、ストライク

ウイツチーズ、
オリジナルあり
FGO

目次

予告	東方黄金魂	予告	——	——	生だつたら（原作：FGO）	——
ザ・ドラえもんズ	東方友情録	予告	——	1	千日紅	——
GS 横島極楽大作戦	予告	——	29	16	オリジナル	——
短編二次創作	——	——	——	——	——	——
男はその時何を考えたのか（原作：GS 女神）	——	39	——	——	——	——
絶望への反抗!!サムライの遺志を継ぐ もの（原作：ストパン）	——	57	——	——	——	——
一発ネタ	——	——	——	——	——	——
【ネタ】もしもサーヴァントが学校の先	——	——	——	——	——	——
115	96	——	——	——	——	——

予告

東方黄金魂 予告

それは聖闘士史上最大の事件サガの反乱が起こらなかつたI-Fの世界。その世界で起こつた語られなかつた聖戦をここに記す。

突如聖域に出現する異次元への穴。

神隠しの行き先であり幻と実体の境界、幻想郷。

待ち受ける最凶の敵に対し、攫われたアテナを救い出すため地上最強の戦士黄金聖闘士達が幻の世界へ突入する！

交錯する思い。

繰り広げられる死闘。

争いは徐々に熱を帯びていく。

己の世界を護るための戦争はやがて、
一対一の究極の戦いへと発展していく！

「ええい面倒！纏めて討ち倒してくれる！」

獅子座レオのアイオリア VS 悪魔の妹フランドール・スカーレット

「あなたがコンテニューできないのさ！」

「この一筋の矢に小宇宙を込めて……」

射手座サジタリウスのアイオロス VS 永遠に紅い幼き月レミリア・スカーレット

「こんなにも月が紅いから本気で殺すわよ。」

「スター・ライトエクスティングションにかけられた者の行く先は死の国以外にありません。」

牡羊座アリエスのムウ VS 封印された大魔法使い聖白蓮

「——いざ、南無三——！」

「発狂かそれとも死か!! お前はどちらだ!」

蠍座スコーキオンのミロ VS 化け狸 十変化ニツ岩マミゾウ

「さあ、弾幕変化十番勝負！始めようじゃないか！」

「オレの手刀はいかなるものでも切り裂くエクスカリバーと呼ばれているものだ！」

山羊座カプリコーンのシユラ VS 山坂と湖の権化八坂神奈子

「あなたは一度――神の荒ぶる御魂を味わうといい！」

「腕を解いた所で必殺拳の威力は変わらないのだ！」

牡牛座タウラスのアルデバラン VS 土着神の頂点洩矢諷訪子

「よくもまあ、いけしゃあしやあとそんな事言えたもんだ。あんな女、敵だよ敵。」

「私がどかせてみせよう、この凍氣で!!」

水瓶座アクエリアスのカミユ VS 熱かい惱む神の火靈鳥路空

「究極のエネルギーこそ核融合! 貴方も私とフュージョンしましょ?」

「私が死ぬのが先か、君がこの白バラに射抜かれて死ぬのが先か」

魚座ピスケスのアフロディイー^テ VS 四季のフラワーマスター風見幽香

「花を咲かせる事は土の力。だから、咲いたら土に還す事もお忘れ無く。」

「今度こそ確実に送つてやるぞ、亡者の国へ。」

蟹座キヤンサーのデスマスク VS 幽冥楼閣の亡靈少女西行寺幽々子

「亡骸は一箇所集まるから美しいのよ、春も桜も同じ…。」

「何があつてもただ一直線に前へのみ進むのじや」

天秤座ライブラの童虎 VS 月の頭脳八意永琳

「さあ、幻想郷の世明けはもう目の前にある！」

「このシャカの一命をかけ今こそおまえたちを倒す!!」

乙女座バルゴのシャカ VS 蓬萊の人の形藤原妹紅

「死を知らない私は闇を超越する、暗い輪廻から解き放たれた美しい弾幕を見よ！」

「お前がどこに居ようと必ず一撃をくれてやるぞ!!」

双子座ジエミニのサガ VS 神隠しの主犯八雲紫

「一つや二つ…結界がそんなに少ないと思つて？」

そして、最後にして最大の難関。

地上とアテナを守らんとする黄金聖闘士の前に、かつてない災厄が立ち塞がる!!

命を喰らう妖怪桜『西行妖』、封印されし咲いてはならない優雅に咲き誇る桜。

見たものは——死——

それは開けてはならない、何者かが復活するパンドラの箱。

反魂蝶 満 開

「スター・ダストエクスティングクション！」

「うおおおお！グレート・ホーン!!」

「くらえ！ギヤラクシアン・エクスプロージョン!!」

「積尸氣冥界波ーー!!」

「ライトニングプラズマ!!」

「バルコのシャカ最大の奥義、天舞法輪!!」

「廬山百龍霸!!」

「スカーレット・ニードル!!」

「おおおおお！アトミック・サンダー・ボルト!!」

「くらえ！エクスカリバー!!」

「オーロラ・エクスキュリュージョン!!」

「ブラッティ・ローズ!!」

「「「アテナエクスクラメーション!!」」

「「「今、この世界に一筋の光明を!!」」

果たして黄金聖闘士達は、アテナを救うことができるのか？

地上と幻想郷、二つの世界の命運を懸けた闘いが今始まる…。

ザ・ドラえもんズ 東方友情録 予告

あなたは知っていますか？22世紀で築いたドラえもんの親友を…。

あなたは覚えていませんか？永遠の友情で結ばれた7人を…。

あなたは忘れていませんか？彼らの物語を…。

幻想郷にあのドラえもんズがやつてきた！

Mr. アメリカン・ドリーム西部のガンマン、ドラ・ザ・キッド！

キッド 「オレの空氣大砲はどんなものでも撃ち抜くぜ！」

中国四千年究極のカンフー、王ドラ！

王ドラ 「長き歴史の中で失われし奥義、お見せしましょう！」

ブラジルの若きスーパーストライカー、ドラリーニョ！

ドラリーニョ 「思い切つっていくよー！」

氷の大地ロシアすらいの星、ドラニコフ！

ドラニコフ 「ガウ、ガウ！」

スペインは赤き情熱の闘牛士、エルマタドーラ！

エルマタドーラ 「オレの怪力を甘く見るなよ！」

古代アラビア砂漠伝説の魔術師、ドラメツド二世！

ドラメツド「ワガハイの魔術、お主にとくと見せるであーる！」

これは幻想郷で繰り広げられる頼れる猫型ロボット達と幻想の麗しき少女達の物語
である！

キッド 「高い所怖い／＼／＼！」

王ドラ 「お、女の子なんて、そんな私は／＼／＼」

ドラリーニョ 「…えっと、何でここに居るんだっけ？」

ドラニコフ 「あお／＼ん…。」

エルマタドーラ 「ちよつとシエスタでもするか…かあ／＼。」

ドラメツド 「ワガハイ水は苦手であ／＼る！」

：頼れる猫型ロボット達と幻想の麗しき少女達の

靈夢「とりあえずお賽銭はここに入れてね。」

妖夢「こういうごちゃごちゃ時には、斬つてから判断するのに限ります！」

チルノ「あたいはさいきよーだ〜!!」

早苗 「常識何て捨ててかかつてきて下さい!!」

咲夜 「お嬢様、ああお嬢様、お嬢様！かりちゅま姿がとても愛らしい!!」

魔理沙 「勘違いするな。私は盗んでいるんじゃない、死ぬまで借りるだけだぜ！」

……頼れる猫型ロボット達と幻想の麗しき少女達の物語である！

目が覚めたドラえもんズが居たのは外の世界から隔絶させた幻想の世界であった。

キッド「何だつて俺たちここに居るんだ？」

王ドラ「ただの噂だと思ってましたが…本当にあるなんて。」

ドラリーニョ「とにかく皆で早く元の世界に戻ろうよー！」

ドラニコフ「ガウ、アウ！」

エルマタドーラ 「俺たちにも居場所があるしな。」

ドラメツド 「ワガハイ、何故かとても嫌な予感がするであゝる。」

幻想の住人達との出会い。

橙 「外の世界にはこんな猫が居るんですか!?」

お燐 「こりやまた、個性的な猫が居るもんだ。」

にとり 「ねえねえ！この道具もつと見せてもらつてもいいかな!?」

早苗 「まさか、こんな形でドラえもんズに会えるなんて思いもしなかつたですよ!!」

文 「新たに幻想入りしたのは6匹の不可思議な猫妖怪達：いい記事が期待できるかも
しません。」

そして明かされる衝撃の事実。

キッド 「今…何て言つたんだよ?」

紫 「受け入れたくないかもしけないけど事実よ。あなた達はもう…。」

親友テレカが輝く時、奇跡が起ころる?

ド ラ エ モ ん ズ 「「「も う 一 人 の 親 友 に 届 け、 親 友 テ レ カ ー ー ー ー ! ! !」」」

こ れ は 永 遠 の 友 情 を 誓 い 合 い な が ら も 歴 史 の 中 か ら 消 え た 6 人 の 物 語 で あ る。

G S 横島極楽大作戦 予告

ヒーローとは、英雄とは何であるか？

その言葉を聞いて思い浮かぶものは十人十色であろう。そこにあるのは護りたいもののために戦う信念があつたのかもしれない。されど彼らにとつて護りたいものを護れなかつた英雄もまた数多くいる。

ここで語るのは惚れた女性を犠牲にして、魔神の思惑を打ち碎いた一人の男の物語である。大きな戦いを終えた彼に待っていたのは平穏の終わりと新たな戦いへの始まりであつた。

アシユタロスとの戦い（通称魔神大戦）が終わり、いつもの騒がしい日常に戻ったG Sメンバー達。横島忠夫もまたかつてのしばかれながらも楽しかつたあの頃に戻ろうとしていた。されど彼の心には戦いの中で失つた彼女の影があつた。そんなある日、彼の運命を変える出来事が起ころる。

「な、なにが目的だ…あんた…?」

『横島忠夫…あなたの文珠を私がもらう』

何者かに狙われた横島忠夫、ソレは彼を圧倒し文珠の力を奪い取つた。彼は文珠だけではなく、霊能力のコントロールもままならなくなつてしまつた。

「ゴーストスイーパーとして終わりなのかな…俺?」

意氣消沈する彼を励まそうとする者達。

「あんたは私の…この事務所の従業員よ！勝手にいなくなるんじやないわよ!!」

「私には何もできません…でも今の横島さんをほつとけるわけないじやないですか…！」

「先生が例えどうなつても拙者はいつまでも先生の味方でござる！」

「ここから勝手にいなくなるんじやないわよ……ここにはあんたもいないと…」

彼に訪れる新たな出会い。

『先代の分まで私はお前の力となる…それが私に課せられた使命であるから』

「ご主人様は…私を見捨てないですか？」

『あなたは…どうしてこんな私を…救おうとするのですか？』

『それじゃあ、まあ、まず…恋っぽいことしようぜ？』

日常を壊そうとする脅威が彼に迫る。

『おみやあらあがこのワシを退治するだと…？やれるもんならやつてみい!!』

『その女は…この世に存在してはいけないのだ!!』

「白竜の力…この私が頂こう」

横島は決意する。あの時の犠牲を増やさないため…護りたいもののため強くなる決意を。

『お主の目指すものは生半可な覚悟では到達できぬ理想じや。それを真実にするために険しき道を歩む覚悟はお主にあるか！横島忠夫!!』

「俺はもう…後悔をしたくないんす…だから俺は護りたいもののために…俺は戦う!!」

そして横島は対峙する。彼にとつて大きな存在である彼女と。

「一度目は俺は弱かつた：美神さんの温情がなければあの時は勝てなかつた」

「二度目は私は慢心していた：横島くんが私を越えるなんて天変地異が起ころるわけないと高をくくつていたわ」

「面を向かつて戦うのはこれが三度目…俺は越えてみせます…美神さん！勝つてあんたに認めてもらうために！」

「私を越える…？横島くんのくせに生意気なことを言うわね。やれるものなら…やつてみなさい!!」

世界は私達が思う以上に広い。これはその無数ある世界の中の一つの物語である。

短編二次創作

男はその時何を考えたのか（原作：G S 美神）

人は大切な人を亡くした時、何を思いどう考えるのか。親友や家族、恋人…ひとそれぞであるが、その根底には愛する心があるだろう。

これは世界の存亡を掛けた戦いで、惚れた女を犠牲にして世界を護つた一人の男の話である。大切な女性を亡くした彼の思い：彼の内に秘めるものは何か？
これは無数に存在する世界の一つの可能性の話である。

～～～～～とある安アパート～～～～～

昭和の古さを醸し出す古いアパート、そこに横島忠夫が帰つてくる。彼が自身の部屋のドアの前に立つと最初に目に映るのがドアの至る所に落書きされた彼に対する多数の誹謗中傷の文字である。その落書きを見て後日消しておくかと考えた彼は鍵を開けて中へと入つていった。

部屋の中は年頃の男性の典型のように散らかっているが、所々不器用ながらも綺麗にしようとした形跡がわずかに残つていた。横島は少しボロボロの座布団の上に座り、ポケットから手のひらサイズの小箱を取り出した。蓋を開けてみるとそこには体が淡く光つている蛍が入つていた。弱弱しくも光るその蛍を眺めた後、蓋を閉じてちやぶ台の上に置くと彼はその場に寝転がつた。そして昼間、事務所で言われたことを思い返していた。

横島「自分の子供として転生、か…。」

それは事務所で過去の美神美智恵が元の時代へ戻った後、現在の美知恵がお腹に赤ちゃんを身ごもった状態で登場した時のことである。そこで言った美神令子の言葉が印象的に残っていた。

美神『もし、転生先が横島君の子供だとしたら!?』

あの戦いで失ったルシオラを復活させるには彼女の靈体が足りなかつた。横島の中に大量にある彼女の靈体も彼の中に完全に同化してしまふ。人間では魂の切り離しは不可能であり、彼女を復活させる手段は何もなかつた。

それに対して美神は両親の細胞から作られる魂の影響について話し、元々の転生前の靈体が同じものなら彼の子供として転生する可能性を指摘した。その場にいた小竜姫達もその可能性に僅かに希望を見据えた。横島も一度はそれで納得はして、将来生まれ

てくる子供に愛情を注げばいい。そう納得して目を閉じた。

??? { } { } { } { } { } { } { }

いつの間にか横島は真っ暗な空間にいた。そこは周りを見渡しても何もない闇が広がっていた。ふと後ろを振り返るとそこには人型のナニカがいた。それは横島に目線を向けると彼に問いかけた。

本当にそれでいいのか？

43 男はその時何を考えたのか（原作：G S 美神）

横島『…どういう意味だ。』

——本当はわかってるんでしょ？美神令子の言つた案に納得していない。

横島『…小竜姫さま達でさえ何もアイデアが出なかつたんだ、それしか方法がないんだよ。』

——しかしそれしか方法がないとしたらあまりにも哀しい結果。

——誰よりも世界を護るため戦つた男は大切な女を失つてしまつたのだから。
その女も恋人として接することができない。

横島『…アシユタロスを倒すとルシオラに誓つたんだ。あいつもそれを望んでいたんだ。子供のこともあいつは待つてくれるって…。』

——それじやあ仮にその方法を行うとしても誰に頼む？

——昔の恋人を蘇らせるために産んでくれと言ふ？

——それで一体誰が了承する。

横島『！それは…。』

——美神令子？彼女は自分が一番でないと気が済まないから難しいんじやない。

—— 氷室キヌ？ 彼女は優しいからおそらく了承するかも知れないが、それでも心に傷を負うと思う。

—— 犬塚シロ？ 彼女はあなたを慕つてゐるから可能性はありそだが、純粹なあの子が自分が一番でないと知つたらどうなることか。

—— それとも花戸小鳩や愛子？ 自分が裏切られた時ショックを受けるのはまず避けられないから同じだけど。

—— どちらにしてもルシオラを産んでくれる女なんていない。 あなたもそう考
えている。

ソレは横島に対して傷をえぐるかのように言葉を紡ぐ。それは彼が“考えなかつた事をソレは言葉にする。そして彼が反論する間もなく次々と言葉を口にする。それは彼を囲むように。

横島『…それ、は…』

——自分は世界を守るために戦っているのに、『人類の裏切者』って民衆から中傷された気分はどうだつた？

——その人類の裏切者として魔族と一緒に美神美智恵によつて消されようとしたし。

——そもそもあの選択の時なぜあなたが選ばなければならなかつたのかな？

——あなたの人生あの親子のおかげで狂わされたね。

横島『美神さん達は関係ないだろ…！』

——美神令子の元で働くことになつて貧乏暇なしになつちやつて。

——時には八つ当たりに近い折檻を受けてしまつて。

——あなたの周囲もそれを普通と捉えてろくな支援もしてくれない。

——美神美智恵も過去を変えようと時間移動を繰り返した結果が、ルシオラを失つたことに繋がつた。

——彼女が今までし時間移動した理由は？本来あの戦いで死ぬのは美神令子であつた。

——ルシオラは美神令子の代わりに犠牲になつた。それが歴史修正の結果。

ソレが放つ言葉には横島の心に異様なまでに響いていた。昔ならそのことについて

言われたとしても考えなかつた事であつた。元々美神のもとで働いたのは自分から望んだことであるし、折檻もよく受けるが大半は自業自得、それに彼女の元で働くのは何も悪いことばかりではなかつたから。それがあの戦いのあともそう思えていたらの話であるが。

い。
——あなたはルシオラのことをなかつたことにしようとする彼女たちを許せない。

仲間だと思えない。

あの場所が辛いものだと思つてゐる。

——しかしながらはあの時道化を演じた。

——それが彼女たちの望む“横島忠夫”だから。

——なぜ固執する？

——それがルシオラの望みだから？

——だとしたら実に滑稽なものだこと。

51 男はその時何を考えたのか（原作：G S 美神）

いつの間にか横島はソレの放つ言葉に反論できなくなっていた。そうじやないと反論しようとしてもなぜか何も言えなかつた。そしてソレがまた口を開く。

あの親子が憎いと思っている？

あの親子の人生を狂わせたいと思う？

もしそうしたいのなら私が手を貸そう。

——あの親子のすべてを壊したいとあなたが願うのなら。

——…すぐには答えないのね。

——ならばまた時が来たら訪れよう。

——このまま道化を演じるのか。

——彼女たちに反逆するか。

——あなたの内で答えが出るのを待とう。

そう話すとソレは横島の目の前で薄らいでいく。そして横島は周りが明るくなつていくのを感じた。

目を開けるとカーテンの隙間から窓の外からの光がこぼれていた。どうやらいつの間にか眠っていたようだ。今日もバイトに行く準備をする中で横島は先ほどの夢について考えていた。はつきりと頭の中での夢の中のことがおぼえられていて、離れな
い。

横島 「…俺は俺だ。道化とかそんなの関係ないんだ…。」

そう言つて準備を終えた横島はちゃぶ台の上のルシオラの靈体が入つた小箱を押入れの中に仕舞う。そして事務所に向かつて部屋を出ていった。

横島が出ていった後、突然黒い球体が出現するとそこから女性が出てきた。大きく胸元の開いた修道女のような服を身に纏う、ミステリアスな雰囲気を漂わせる妙齢の女性は嗤つていた。

???『さあて、この世界の“横島忠夫”はどんな選択をするのかしら？美神親子と離反する展開はもう見飽きたから、面白い答を期待してゐるわね。』

そう言うと女性はまた黒い球体を生み出してその中に入る。その球体がうつすらと消えていった後、そこにまた静寂が包まれる。

横島忠夫の選択…それがもたらすものは何か、それはまだ分からぬ。

絶望への反抗!!サムライの遺志を継ぐもの（原作・ストパン）

物語において『I F』というのは数多くある。もしも別の選択をしていたら、もしもとある人物の生死が変わつたら、そう思ったことはないだろうか。私たちが知らない世界で、もしかしたらその『I F』があるのかもしれない。

これは一人の人物の死から分岐した中の複数ある可能性の一つの物語：

私は甘かつた

——人型のネウロイと接触した時、もしかしたら分かり合えるかも知れないと思つ

ていた

——それが間違いだと、あの時の私は気づかなかつた

『何をしている宮藤！』

『坂本さん……』

『撃て！撃つんだ、宮藤！』

59 絶望への反抗!!サムライの遺志を継ぐもの（原作：ストパン）

『違うんです！このネウロイは……』

『何をしている？早く撃て！』

『駄目です！待ってください！』

『惑わされるな！そいつは人じやない！』

『違うんです、そんな事では……』

『撃たぬならどけッ!!』

——護るために敵を撃つ覚悟があの時の私はブレてしまつた

『きやああー！？』

『少佐！？』

61 絶望への反抗!!サムライの遺志を継ぐもの（原作：ストパン）

『あ
あ
あ
…』

——奴らとわかりあえるという幻想を抱いてしまった

『坂本さんツ!?

『坂本さん、 目を開けて下さい……！ 坂本さん……！ 坂本さん……！』

——あの時、私にもっと力があれば坂本さんは助かつたかも知れない

『坂本美緒大佐は名誉の戦死を遂げた』

『美緒……美緒……！』

63 絶望への反抗!!サムライの遺志を継ぐもの（原作：ストパン）

『彼女は上官、部下からの信頼も厚く、大変素晴らしい軍人であった』

『坂本さん、どうして…』

『その戦役を終え、ネウロイの脅威から解放された彼女は……』

——坂本さんが治癒魔法をかけ続けても助からないと知った時に涙は流し尽くした

『貴方のせいよツ!! 貴方が勝手な行動をとらなければ坂本少佐は!!』

『あのネウロイの事もですわ! いくら人の形をしていてもあれはネウロイです!!』

『すぐに落とさなかつたあなたの甘えが、少佐を殺したのよ!!』

——そう、坂本さんを殺したのはネウロイではなく

『私が殺したの』

私はようやく理解できた

——ネウロイは人類の敵であり、殲滅するべき悪であると

『あなた…』

『ペリースさんの言う通りです』

『ネウロイと分かり合えるかもなんておめでたい考え…』

『そんな甘え切つた精神で戦場に出ていた自分に、反吐が出ます』

——自分の甘さで人類にとつて大きな損失を生んでしまった

『坂本さんはまだ死ぬべき人じやなかつた』

『もつと多くの人を救えただろうし、もつと多くのネウロイも倒した筈です』

『だから私は坂本さんの分まで……』

——人を救うなんて事私にはできないから

——最期の時まで命燃やして

『ネウロイを殲滅してやる……！』

1948年 第501統合戦闘航空団基地（以下501JFW）・海
岸

地平線の彼方から太陽が顔を覗き始める頃、一人の女性が海岸沿いで扶桑刀を振るつ
ていた。日に照らされる長い黒髪を後ろに纏め上げてポニーtailにし、扶桑で着用さ
れる青と白の制服を着たその女性は、演舞を魅せるが如く華麗な技を披露する一方で、
彼女が発する殺気に似た雰囲気は見る者を恐れさせるであろう。

「…フツ！…シツ！」

「ハアアア…！」

「ズエア！」

彼女が扶桑刀を振るう度に波が押し寄せて水しぶきが飛び、長い時間行っていた証の汗が飛び散つていく。一太刀振るう毎に圧倒させるような剣幕で続けていた彼女が一度体勢を整えると、基地に設置された時計を確認する。時間を確認すると扶桑刀を鞘に納め、体に滴る汗を近くに掛けてあつたタオルでふき取り、水筒の蓋を緩めて中の水で喉を潤わせる。それが終わると元々着ている制服と首にかけている銀色の眼帯の上に、白い軍服を羽織ると基地に歩いていく。

そして今日もまた、彼女……

【宮藤芳佳】

中佐の一日が始まる。

午前の訓練を終えた宮藤中佐は、次の午後の訓練の準備に取り掛かろうとしていた。そんな時後ろから声を掛けてくる人物がいた。薄茶色の髪に後ろを三つ編みにし、服の上からでも分かる豊満なバストが特徴であるストライクウイットチーズの射撃手「リネット・ビショップ」少佐である。

「芳佳ちゃん、ここに居たんだね。ミーナさんが芳佳ちゃんに伝えたいこと…」

「何の要件だビショツプ少佐」

「…すみません、宮藤中佐。ミーナ司令が宮藤中佐に伝えたいことがあるから指令室まで来てほしいと」

「解った」

言葉少なくそう言うと宮藤中佐は指令室へと歩を進めた。リーネはそんな彼女の背中を悲しい目をしながら黙つて見つめていた。

坂本美緒の死亡から4年、ネウロイの侵攻は増す一方であつた。かつては週一度の襲撃だつたのが今やほぼ毎日の上、同時に2体以上出現する日がある程になつていた。更にウイツチの数も激化する戦場により戦死者が続出、また坂本美緒の一件以来から「19歳後半になつた者は戦役から降ろされる」規則が新たに生まれてしまい、その数はネウロイの数に反比例して減少の一途を辿つていた。

501JFWもその例に漏れず大きく変わつていつた。「ゲルトルート・バルクホルン」と「エーリカ・ハルトマン」は規則に則つて戦役から降ろされ、所属していたカルスランド軍に戻つていつた。「サニニヤ・V・リトヴァク」は軍に残ろうとしたが「エイラ・イルマタル・ユーティライネン」から引き止められ、本来の両親探しの旅に出ていった。「シャーロット・E・イエーガー」も同じく年齢による引退、彼女に着いていこ

うとした【フランチエスカ・ルツキニ】をなだめて後にした。また【ペリーヌ・クロステルマン】はあの日以降宮藤中佐に対して考えが変わつていったのをここに追記する。

今の501JFWに残つているのは宮藤中佐、リーネ、ペリーヌ、ルツキニそして入隊したての新米ウイッヂが複数と現在部隊の指揮を執つている司令といつたものになつている。

501JFW・司令室

司令室に一人、両手を顎の近くで組んでいる女性が居た。彼女はここ501JFWの隊長を務めている「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ」准将である。ウイツチとして引退したが、本人の高い指揮力から今なおストライクウイツチーズを纏め上げている存在である。そんな彼女の机の向こうにある扉からノックの音がした。

「入りなさい」

「失礼します」

その声と共に扉が開かれ宮藤中佐が姿を現した。彼女はミーナの前に進んでいく。第三者から見たらその重苦しい雰囲気に圧倒されそうなものがあった。

「話とは何ですか、ヴィルケ准将」

「それはあなた自身がよく解っていることでしょう？宮藤さん」

「…さて、何の事でしようか？」

「命令外の単独出撃、ストライカーの無断使用、無謀にもほどがある接近戦での戦闘：挙げればキリがないわね。あなたが躍起になるのは解るけど、軍人としての規律を乱すのは…」

「小言を言うためにわざわざ呼んだのですか？」

「言いたくもなるわね、でもそれは次の機会にしましよう」

ミーナがそう言うと机の引き出しから一枚の報告書を取り出し、宮藤中佐に見えるよう机の上に置いた。それは新たに出現したネウロイの巣に関するものであつた。

「先日帰還した巡視兵から報告があつてね、新たに発生した巣の調査をしたとき見たら
しいのよ……4年前のあの日から姿を消した人型ネウロイが発見されたそうよ」

その言葉を聞いてそれまで静観していた宮藤中佐の表情が一変した。それは憎しみ
と怒りに満ちた表情でミーナを睨んでいた。彼女はその表情に眉一つ動かさず自身に
向けられる目をまっすぐ見ていた。

「先日!?なぜ今になつてそんな重要なことを!!奴は私がこの手で討つと…!」

「だからよ。この事を伝えれば貴方は一人出撃するでしょう、4年前の時みたいに」

「ツ！」

「調査はペリースさんとルツキーさんに行かせています。もうすぐ帰還するでしょ
う」

「私は…！」

「話を聞きたければそれまで待ちなさい。それともまた一人で出て仲間を危険にさらす
？美緒みたいに」

2人の雰囲気が険悪なものになつていて、その時、指令室の扉が大きな音を立てて開いた。そこには501JFWに配属されて間もない新人のウイッチの一人が息を切らしていた。ここまで走ってきたであろう彼女は乱れた息を一度整えてから切り出した。

「失礼します!!近海に大型ネウロイが突如出現、現在こちらに猛スピードで接近中です！」

81 絶望への反抗!!サムライの遺志を継ぐもの（原作：ストパン）

「何ですって!?」

「…！」

「どうやらステルス機能を備えており監視も気づけず、火器の整備もこのままだと間に合わないです！ですのでつ宮藤さん!?」

その時報告を聞いてすぐに新人ウィッチの横を宮藤中佐が通り抜けていった。そして廊下を駆けていく足音と共に彼女の姿は小さくなつていった。

ネウロイ出現に慌ただしくなつてゐるその間を通り抜けて行く宮藤中佐は自身のストライカーユニットの前に到着し装着する。魔力を使用した際出現する犬耳としつぽと足元に広がる魔法陣が出ると飛行準備に移る。魔力によつて足元にプロペラが発現して回転し始め、軍服が風に揺れ、背中に装備した扶桑刀の鞘が小窓から漏れる光に反射して煌いた。

「宮藤芳佳、出撃する！」

その一言が発せられると同時に宮藤中佐は飛び出していった。加速を増していくほど体は徐々に前に倒れていき、最後に飛び上がるときに平衡を保つて大空へと飛んでいった。後ろから新米のウイツチ達が何かを言っていたがすでに飛び立った彼女には聞こえなかつた。

宮藤中佐が飛び立つて数十分後、彼女の前方数キロ先に大型の飛行物体が接近しているのが確認できた。それがネウロイだと確認した宮藤中佐は背中の扶桑刀の柄を手に取り、鞘から刀を抜いた。日の光に反射するその刃を握りしめ構え、そしてネウロイに向かつて高速で接近していく。

自身に向けられる敵意に気づいたネウロイはビームを発射するが、宮藤中佐はそのビームに対してもう限の動きによる紙一重の回避力で避けていく。下手すれば撃墜されかねない程その動きは危ういもので、しかし確実に避けていく。

ネウロイの懷に入り込んだ宮藤中佐は刀に魔力を集中して込めると、その刃は光り出す。そしてその煌く刃でネウロイの上部の装甲に斬り込んだ。

「シツ！」

「ハア!!」

「ゼア!!」

宮藤中佐の刃はネウロイの体の一部をまるでバターのように切り裂き、続けざまに再び攻撃もまるで見えていくかのように回避していく。数度彼女の皮一枚削るが、そ

れを気にも留めず刀を振るい続けた。

そしてついに宮藤中佐の眼の前に赤く輝くネウロイのコアを見つけた。それに対して扶桑刀の切つ先をそのコアに狙いを定める。

「…終わりだ」

そう言うと勢いをつけてその刃がコアを貫通していくつた。そしてネウロイは悲鳴にも似た音を立てた後、碎け散った。ネウロイの体の破片が宝石のように光りながら散つていく中、宮藤中佐は周囲の確認を終えた後一息吐いて、基地へと帰還していくつた。帰

還の途中整備を終えたりーネ達の部隊が合流したが、撃墜したことをリーケに伝えるとまた飛んでいった。また宮藤中佐が出撃した後、調査を終え帰還していたペリーヌ達も別のネウロイと戦闘していたという報告が入っていた。

~~~~~501JFW・宮藤中佐の部屋~~~~~

太陽が沈み月が辺りを照らす光が窓から漏れているその部屋に宮藤中佐が入つていつた。帰還していくものの無断出撃をミーナに咎められた後、彼女は食事を取つて入浴を終えた後である。部屋に入つた彼女は棚に乗つている写真立てに目を向けた。そこにはかつての自分と坂本美緒の笑顔が写つていた。その写真の前に彼女は立ち、言葉を

紡いだ。

「坂本さん、今日も私はネウロイを撃破しました。そしてあのネウロイの手がかりをようやくつかむことが出来ました。近日中に奴を討伐するための準備に入ります」

待ち望んでいたペリーヌ達の報告によれば、あの日の人型ネウロイは他の巣を行つたり来たりを繰り返しているようで、その情報を元にした討伐作戦を現在練る所であつた。ミーナの忠告が聞いたのか宮藤中佐は無断出撃を行わなかつた。その報告後、彼女はベッドに入り就寝していくた。

そこは一面色とりどりの一面の花で埋め尽くされていた。宮藤中佐はその景色の中にポツンと立っていた。彼女が周囲を見渡すと遠くに人影が見えた。その人影に向かつて彼女は進んでいった。

段々その姿が視認できる距離になつた時であつた。その人影は彼女の着ているものと同じ白い軍服を纏つていて、艶やかな黒髪を後ろにまとめていた。そして人影が宮藤中佐のほうへ振り返つた。

そこには右目を銀色の眼帯を付けた女性、坂本美緒であつた。彼女の元に行こうと宮藤中佐は進もうとするが、そこから先にどうしても進めなかつた。それでも彼女は声を上げていつた。

91 絶望への反抗!!サムライの遺志を継ぐもの（原作：ストパン）

『待つてください！坂本さん！…坂本さん!!』

『……』

「私、あれから強くなつたんです！大型のネウロイも倒せるようになつて、階級も中佐まで上りました！もう昔の弱い私ではないです！」

『……』

『だから…お願ひです…そんな哀しい顔をしないでください…坂本さん…』

宮藤中佐の眼に映る美緒は、哀しい表情であった。その姿も涙でぼんやりとしていた。涙を拭つても、どんなに叫んでも彼女の表情は変わらなかつた。そんな様子の宮藤中佐に対して美緒が口を開き、何かを話そうとした。

『』

『……どうして私は坂本さんが何を言つているのか分からぬの？どうして…』

美緒が何かを話していることは解る、しかし何を言っているのか今の宮藤中佐には聞こえなかつた。そして美緒は彼女から顔を背け、進んでいった。それに気づいた宮藤中佐は進もうとあがくが、先ほどと変わらず進めなかつた。それどころが美緒も周りの景色も段々遠のいていくばかりであつた。そして彼女の必死の叫びも虚しく、自身の意識も遠くなつていつた。

窓から漏れる僅かな光に照らされるように目が覚めた宮藤中佐は、上体を起こす。その眼には涙の跡が残つていて、それを拭うと彼女はベッドから床に足を付けて起き上がる。寝汗で着いた服を脱いで汗を拭つていく。その体には無数の傷が残つており、4年間の戦いで着いたものであつた。そして着替えを終えると、首に銀色の眼帯を身に着け、立て掛けていた扶桑刀を手に取ると彼女は部屋から出て行つた。

「…強くならなくちゃ、奴らを殲滅なんてできない。昨日も僅かに掠つてしまつたから…もつと強くならないと…」

自分にそう言い聞かせるようにして宮藤中佐は今日も訓練を行う。あの人型ネウロイを倒すため、ネウロイを殲滅するため彼女は戦う。

復讐に燃える彼女の行きつく先に何が待っているのか、それは未だに分からぬ：

一発ネタ

【ネタ】もしもサーヴァントが学校の先生だつたら（原作：  
FGO）

ファンタム「3年F組」 ぐだ子「ファンタム先生！」

教室

ファンタム「クリスティーヌ おお クリストイーヌ 我が愛 我が歌姫——」

ファンタム「微睡む君へ 私は唄う 愛しさ込めて——」

生徒一同 「「クリスティーヌ：」「

ファントム「私と唄おう もう一度 もう一度 クリストイーヌ クリストイーヌ  
私の歌姫」

生徒一同 「〔クリスティーヌ……〕」

外

ぐだ子 「受験間に合うかな……」

英靈豆知識：ファントム・オブ・ジ・オペラ

十九世紀を舞台とした小説『オペラ座の怪人』に登場した怪人。

した彼は、音楽の天使と名乗つて彼女をオペラの女性主役歌手プリマドンナに仕立て上

げるため彼女に歌を教えていたが、彼女が幼なじみへの求愛に答える姿を見て嫉妬に狂い、恐ろしい事件を引き起こしていった。

レオ二ダス「3年F組!!」ぐだ夫「レオ二ダス先生！」

教室

レオ二ダス「でええりやあ!!!」↑板書中

レオ二ダス「ふんぬー!!」↑蛇が這つたような文字見たい何か

レオ二ダス「はい、ここテストに出ますよ…」→からうじで読める文字で筋肉と書いてある

外

ぐだ夫「やつてらんねー……」

英靈豆知識：レオ二ダス1世

テルモピュライの戦いで300人の兵士を率いたスパルタ王。十万人のペルシャ軍に対してわずか三百人で立ち向かつたとされる偉業が有名だが、デルポイの神託で「王が死ぬか、国が滅びるか」と告げられ、死を覚悟した彼は出陣の直前に妻に「よき夫と結婚し、よき子供を生め」と言い残したという。

ダヴィンチちゃん「3年F組!」ぐだ夫「ダヴィンチ先生!」

教室

ダヴィンチちゃん 「<sup>イチキュッパ</sup>1980の限定礼装が2割引き! ボーナス一括払い 5%OFF  
! 今ならポイント還元が13%ついて!」

ダヴィンチちゃん「さて! いくら?」→数学の小テストを聞き取り形式にした

外

ぐだ夫「6割引きだつたよ…」→結果10点中4点

英靈豆知識：レオナルド・ダ・ヴィンチ

ルネサンス期を代表する博学者で『モナ・リザ』などの作品から画家としての名声が高いが、芸術以外にも医学、科学、数学、建築などに精通し、当時としても計り知れない先進的、且つ莫大な知識を示したために「万能人」の異名を持つ。

アストルフオ 「3年F組！」 ぐだ子 「アストルフオ先生！」

教室

アストルフオ 「次、次、次の問題は♪島、島、島崎さん！」

ぐだ子 「3Xです」

アストルフオ「♪♪」↑無駄にのりのよいダンス

アストルフオ「違います」↑真顔

外

ぐだ子「傷つくわ…」

英靈豆知識：アストルフオ

フランク国王に仕える武勇に秀でた12人の配下『シャルルマーニュ十二勇士』の  
騎士の一人。

偶然から触れた相手を必ず落馬させる「魔法の槍」を始めとした様々な魔法のアイテ

ムを入手し、様々な功績を立てている。月世界旅行のエピソードは一種の皮肉になつて  
いる。

ランサーアルトリア（以下Lアルトリア）「3年F組！」ぐだ子「アルトリア先生！」

教室

Lアルトリア「授業だ。この問題が分かる者は居るか」→愛馬ラムレイに乗馬中

Lアルトリア「…居ないのか」

ぐだ子 「…はい」

Lアルトリア 「頭が高い!!」

外

ぐだ子 「どうすりやいいのよ…」

英靈豆知識：アルトリア（ランサー）

エクスカリバーで有名なアーサーだが、ほかにも様々な神器を持つていたとされる。その中でロンゴミアントはアーサー王が愛用していた槍で、初登場の際は、穂先から血を滴らせた白い槍と描写されている。その威力は凄まじく、一振りで数百人を吹き飛ばす程だという。カムランの丘の戦いでアーサーがモルドレッドを倒すのに使用された。

デイルムツド「3年F組」ぐだ夫「デイルムツド先生！」

教室

デイルムツド「芭蕉の句には……」

ソラウ「デイルムツド！」バンッ！→教室のドアを開けて入ってくる

デイルムツド「ソラウ様！？」

ソラウ「私の愛を今日こそ受け取つてもらうわ!!」

デイルムツド「いえ、一応教師と生徒なのでそれを受けるわけには…!?」

ケイネス「…令呪を持つて命じる、ランサー」↑—M0）ナズエミテルンデイス！状態

デイルムツド「お待ちくださいケイネス様ー!?!」

外

ぐだ夫「授業しろよ…」

教室

マルタ「3年F組」ぐだ夫「マルタ先生！」

英靈豆知識：デイルムツド・オディナ  
 フイン物語群で語られるファイアナ騎士団の一員。騎士団の中でも優れた戦士で、美しい容姿である上に女性を虜にしてしまう魔法の黒子を、妖精によつて額（または頬）に付けられていた。主君のファインの婚約者グラーニアが彼に恋して逃避行することになつたり、何とか許してもらつて彼女と結ばれたのもつかの間魔猪の牙によつて致命傷を負わされて、グラーニヤの件を根に持つていたファインから見殺しにされたり、かなりの不幸体質。

マルタ「漢字テストを行います、島崎さん。マスターでしたら読めるはずです」↑黒板に吐露非狩古鬱と書いてある

ぐだ子「読めません…」

マルタ「ト・ロ・ピ・カ・ル・フルーツだ!!」ゴスツ!!↑黒板に拳を叩き込んでひびを入れる

外

ぐだ子「そんな無茶な…」（黒板にひび入れるつて…）

英靈豆知識：マルタ

悪竜タラスクを鎮めた、一世紀の聖女。妹弟と共に歓待した救世主の言葉に導かれ、信仰の人となつたとされる。聖者・殉教者列伝の『黄金伝説』では一心の祈りと聖水を振りかけることでタラスクを抑え込むことに成功し、鎖に繋がれて飼い犬のように聖女の下にひれ伏した怪物を、長らく苦しめられ続け、家族を喰われてきた村人たちは石礫でもつて打ち殺したという。

黒髭「3年F組！」ぐだ夫「黒髭先生！」

教室

士郎「ここか…？」ストン↑人間サイズの黒髭危機一髪一本目成功

凜 「……」ね ストン↑二本目成功

ぐだ夫 「とりあえずここに…」 ストン

ドーン!!!↑黒髭危機一髪が爆発した音

メフィスト 「はい、掃除当番で～す」 ↑教室のドアから入室

放課後

ぐだ夫 「爆発オチなんてありかよ……」

黒髭 「拙者はまさかの名前オチでバザるよ!？」

英靈豆知識：エドワード・ティーチ

「黒髭」の名で知られる世界で最も有名な大海賊。海賊として身を起こし、瞬く間に大船団を作り上げると、カリブ海を支配下に置き、酒と女と暴力に溺れ、莫大な財宝を手に入れた。豊かに蓄えられた髭には、ところどころに導火線が編み込まれていて、後の海賊のイメージを固めた。

英靈豆知識：メフィストフェレス

ゲーテの戯曲で有名なファウスト博士の伝説に登場する悪魔。諸説あるが、その名は「光を愛さない者」を意味するという。ファウストが自身の魂を代償に召喚し、彼の底なしの欲望を満たすために様々な力を貸すことになる。戯曲では、神にファウストの運命の行く末を賭けて勝負し、ファウストのあらゆる願いをかなえた後、契約通りに魂を奪おうとしたところで神に邪魔され、ファウストはそのまま昇天して救済される。

ギル「イベントだ」ぐだーず「校長先生!!」

体育館

マルタ「校長の話です」

ギル「明日からイベント」

ギル「のーはすだつたが!!」↑鎧をキャスト・オフ

ギル「<sup>フアウ</sup>獸が走り続けているため、アプリに入れないので」↑S t a y / n i g h t の

服装に変わる

外

ギル「イベント開催を延長する!!」

ぐだーず「もーいや!!」

英靈豆知識：ギルガメッシュ

古代メソポタミア、シユメール初期王朝時代のウルク第1王朝の伝説的な王。数多くの神話や叙事詩に登場するこの王は実在の人物であつたと考えられている。ギルガメシュという名は「祖先は英雄」という意味を持つ。彼の伝説は後に『ギルガメシュ叙事詩』と呼ばれる一つの説話へとまとめられていった。これは今日最も知られているシユ

メール文学である。

カルデア内

ぐだ夫「という夢を見たんだけど、マシユはどう思う？」

マシユ「先輩、今日はぐつすり休んでください。疲れてるんですよ」

## オリジナル

### 千日紅

4月某日。長く寒い冬も終わりを告げ、桜を始めとした花が咲き誇つていく春の季節の中東京近郊の都市【双紅市】のアパートに一人の青年高山茂政たかやま しげまさは今日行われる『城北大学』の入学式の準備をしていた。慣れないネクタイを結びながら彼は今年から始まる大学キャンパスライフを考えていた。

茂政「今日から大学生活か？」

高山茂政は今年の3月、生まれ育つた故郷から離れた、城北大学に入学することになつた。そのために入学先に近いアパートを見つけ、高校の卒業式を終えて暫らくしてから関東の地に足を踏み入れた。周りに誰も知り合いがいない所に来た理由は自身の学力で学びたい分野のあつて行けるのがここくらいだつたのもあるが、一度別な所に住んでみたいという願望が密かにあつた。色々な物がある東京に近い関東圏の大学にしたのもそれが理由である。今までできなかつたことをやつてみたいという思いがあつた。

準備も終えて軽く朝食を取つてからマスクを着用してアパートを出る。春の風に乘つてくる花粉を煩わしく思いながら大学に行くための横断歩道に行く途中、一人の少女が彼の前方からやつてくる。高校生位の年で真っ白な肌を目立たせるように上下を黒で統一した喪服のような服装で緋色の眼をした少女はどことなく儂げな雰囲気を漂わせていた。茂政はその雰囲気に思わず目を奪われていたが、先を急ごうと思い少女とすれ違う。

その時である。彼女とすれ違つた瞬間、異様なナニカを感じ取つた。それは頭の中で何者かがナニカを壊そとするような感覚であつた。それは一瞬感じ取つただけで直ぐに消えてしまう。後ろを振り返ると少女はすでに数メートル先の自動販売機の前まで離れていた。先ほど感じたナニカが何なのか疑問に思つたがすぐに気を持ち直して大学に向かつていった。

そんな彼を横目に見つめる黒服の少女に気づかず…。

それから入学式が終わつた数日後、特に何事もなく大学の講義をこなしながら何となくで入つたボランティアサークルのたまにある活動に参加する日々を過ごしていた。バイトに関しては親からの仕送りを上手くやりくりしていて余裕はあるので保留といつた所であつた。同級生やサークルの先輩たちから時にはからかわれることもあつたが、彼にとつてそれは悪くないものであつた。

そんな平凡な日常を過ごしていたある日のことであつた。講義のため教室に向かつ

ていた時、何かの気配を感じた。振り返ると良い香りと共にひとりの女性が彼の近くにいた。それはやや茶色がかつた長髪に大きくパツチリとした目をした女性として可愛い分類に入る子であつた。青色のかわいらしい服装の女性は彼が自分のほうをいきなり振り返つたことに驚くが、特に気にしない感じで声を掛けてきた。

?? 「ねえ君、ちょっとといいかな?」

茂政 「はい、何でしようか…。」

?? 「そんなかしこまらないでいいよ、同じ1年同士だからさ。」

茂政「…何か用ですか？」

?? 「ああ、ごめんね。私は鈴木亜津子すずきあつこって言うの。何だか君が一人寂しそうにしていたからつい声かけちゃったんだ。それで君の名前は？」

茂政「…高山茂政です。要件は一体なんでしょうか？」

亜津子「敬語じやなくともいいんだけどな、まあいいか。用事はさ、この後講義が終わつたらちよつと会わない？君と話してみたいんだあ。」

茂政「…何で私に声を？自分でいうのも何ですが、特に何があるわけでもないですよ。」

亜津子「そう悲観的なこと言わないでよ、私がそうしたいと思つたから声を掛けたんだよ。こうやつて会つたのも何かの縁だと思つてさ、ね？お願い。」

茂政「…話だけなら別にいいですが。」

亜津子「お、引き受けてくれる？それじゃあ、今日は4限目で終わるから、終わつたら正門前で待ち合わせしようね、またね。」

そう言つて亜津子は茂政とは別の教室に向かつて去つていった。いきなり声を掛け

られたのには驚いたが、彼も一人の男である。可愛い子に誘われたのなら心が躍るのは仕方ないことであろう。その後講義も滞りなく終わり待ち合わせの正門前に到着した。そこには既に亜津子が正門に背を傾けて携帯電話で誰かと話していた茂政が彼女に近づいた時彼女は話し終わつたのか携帯を切つてポケットに仕舞つた所で彼が到着したのに気付いた。

亜津子「お、来てくれて嬉しいよ。来てくれるかちよつと不安だつたんだ。」

茂政「誘われた以上は行かないといけないと思つて…。」

亜津子「ありがとね、早速だけど近くにいい喫茶店があるんだ。そこに行こうよ。」

そう言つて先を行く彼女に着いていく茂政は、賑やかな場所から少し離れた所にある「サーペンツ」というおしゃれな雰囲気の喫茶店に入った。内装は普通の喫茶店といった感じで、亜津子は常連のように店員と親しげな挨拶を交わすと店の奥の席に案内される。そこでお互に向かい合つて座り、注文を取ることにする。

亜津子「ここは卵を使つた料理がおいしい所だからおすすめだよ。私は卵サンドイッチとオレンジジュースにしようかなつと。茂君は何にする？」

茂政「今そんなにお腹すいてないので、ウーロン茶だけでいいです。」

亜津子「ありやま、それは残念。今度来るとき頼んでみなよ。店員さん注文お願  
い。」

亜津子がそう言うと店員に2人の注文を言い、店員が注文を確認してキツチンに向  
かつたのを見てから話が始まる。

亜津子「ここね、私がよく来る喫茶店なんだ。ちょっと人から離れた場所で落ち着くし、料理もおいしいからね。」

茂政「…改めて聞いてもいいですか？何で私に声を掛けたのかを。」

亜津子「…君に声を掛けたのはね、君が面白いと思つたからだよ。」

茂政「面白い？」

亜津子「だつて君真面目な感じの割に、意外と天然などころがあるんだよね。同じ学科の子やサークルの先輩たちのからかいを真面目に受け取っちゃてるの見ていたんだ。それで君がどんな人間なのか知りたくなつたんだ。」

茂政「…そんな物ですか？」

亜津子「意外とそう言うものだよ、人と人の縁つていうのはちょっととしたきつかけで出来るからさ。あ、注文きたよ。」

亜津子がそう言つた後、店員が注文したものをお盆に載せてやつてくる。店員が注文された卵サンドイッチとオレンジジュースを亜津子の席に、ウーロン茶を茂政の席に置き、ごゆっくりとお辞儀をして去つていった。

亜津子「来た来た、じゃ早速食べようか。話しあは後でゆっくりと、ね。」

茂政「え、ええ…。」

その後亜津子はサンドイッチをおいしそうに頬張りながら、オレンジジュースをストローを付けて飲んでいく。茂政もウーロン茶を少量ずつ飲んでいく。それから落ち着いた所で亜津子が話を切り出していく。

亜津子「そう言えば茂君つてどこ出身なの？私はここが地元なんだ。」

茂政「そうなんですか、私はM県のF市で生まれ育ちました。」

亜津子「え、そこつて確か噂のあの事件があつた？」

茂政「いえ、あれはあくまで噂でしかないですよ。ネットで色々肉付けされてできたものですよ。」

亜津子「そつか、本当だつたら聞きたかつたな。噂の”死神”についてさ。」

茂政 「現実にそんな事ありえないと思いませんが…。」

M県の死神事件：3年前茂政が住んでいた町の近くで起こった事件の名前で、とある殺人事件から広がったことから呼ばれるようになつたものである。町中のビルの一つのある部屋で殺されたという人物はそのビルに拠点を置いていた宗教団体の幹部3人で、死因は急所を一突きされて殺されていたという。その容疑者として浮かび上がつたのが死神であつた。その理由は犯行時刻の夜が更けていつた時間に奇妙な目撃情報からで、犯行現場の近くで全身黒ずくめの服を着た真っ白な肌のナニカをみたというのであつた。それが噂話で色々肉付けされていつたのか、宗教団体の闇を裁きに来た「死神」だとネット界隈で騒がれていた。犯人は未だ見つからず、手掛かりも残つていないことからますます騒がれているものである。

しかし茂政にとつてそれはただの噂にしか過ぎないと言うのが本音だつた。犯罪を犯すのはいつだって人間でしかないというのが彼の出した結論であつた。その後も他

愛のない話をする中で、いつの間にか日が沈み始めていた。

亜津子「あゝだいぶ日が暮れてきたね。」

茂政「そうですね、それじゃあ今日はこれでお開きにしますか。」

亜津子「…ねえ、茂政君はこの後予定はあるかな?」

茂政「いえ、声を掛けてもらわなかつたらそのままアパートに帰る予定でしたが。」

亜津子「それじやあさあ、ちよつと寄りたい所があるんだ。一緒に行かない？お願ひよう。」

そう言つてくる亜津子は手を合わせて首をかしげる仕草を取る。しばし悩む茂政であつたが、ここまで来た以上はまあいいかと思つた彼は彼女の頼みに了承する。彼女曰くここから少し歩いて行つた先にあるというので会計を済ませてそこに向かうことになつた。

外は既に暗くなり、街灯に灯がともり虫が光に惹かれて突撃してはぶつかっていく様子がうかがえる。ふと空を見れば蝙蝠も通り抜けていった。町中も仕事帰りのサラリーマンや買い物帰りの主婦がまだらに歩いている中、2人は目的地に向かつて歩いていた。更に進んでいく内に徐々に人気が無くなつていつても、亞津子は歩き続ける。その後をついていく茂政であつたが、段々周りが人の気配のない場所になつていくのに違和感を感じた。

気のせいではない、先ほどまでの喧騒が嘘のようになくなつていた。人だけではない、街灯に突撃する虫も、たまに飛び交つていた蝙蝠も、何もかも静まり返つた空間になつっていた。二人の歩く音が響くだけの世界がここにいる2人だけしかいないと思わず錯覚してしまうほどであつた。

しかし茂政が声を掛ける前に亞津子は歩を止めた。そして口を開いた。

いや、二人だけではない、後ろからナニカの気配を感じた。コツツ・コツツと足音が聞こえてきた。茂政はそれを肌で感じ取り、体中を異様な恐怖感が襲う。後ろを振り返る勇気を持てず前にいる亞津子に声を掛けようとした。

茂政 「あ、あの…。」

亜津子 「…本当に君は面白いよね、ちょっと魔術かじつただけの私でも魅了できるなんてさ。」

茂政 「え、一体何を言つて…？」

亜津子 「気を付けたほうがいいよ、君みたいな無自覚に魔力を垂れ流す子が狙われやすいからさあ。」

魔術？魔力？狙われる？一体何のことを言つてゐるんだ？恐怖に押し潰されそうな彼にそう言う亜津子に思わず背筋が凍つた。今まで感じていた明るい子だつたのが、まるで別の世界の住民のようであつた。そして彼のほうに振り向いた彼女の顔は嗤つていた。そして

亜津子「まあ、私たちにとつては格好の獲物だつたけどね。」

それを聞いた後、後ろから殴られた感覚を最後に茂政の意識は消えた。

静寂に包まれたその場所に3人のヒトがいた。一人は気絶している茂政、もう一人は相変わらず彼を見下して嗤つてゐる亜津子、そして黒いフードを被つた顔の見えない男がいた。

黒フード「…こいつは随分と高い魔力を持つてゐるな。幸いなのはそれと無縁な生活をしていたことだな。」

亜津子「どうですか？これならあのお方への供物として十分だと思いますが。」

黒フード「ああ、これならば<sup>ゞ</sup>満足頂ける…む？」

亜津子「どうしました？」

黒フード「いや、何か気配を感じたような…！」

亜津子「な!? だ、誰で…!？」

その言葉を遮るように、何者かが黒フードを掴んだ。そして黒フードは世界が反転し

たように錯覚すると同時に地面に叩き付けられた。更にいきなりの奇襲に驚く亜津子に対しても顔面を思いつきり平手で突き飛ばす。2人を一瞬で地に伏せると気絶中の茂政を背負つてその場を離れた。

そこから2人から離れた場所に茂政を降ろすと彼の頬を軽くたたいて起こす。何事かと目を開ける茂政の目の前には真っ白な肌に緋色の綺麗な目をした顔の少女であつた。それは入学式の時すれ違つたあの少女であつた。何でここに居るのかや何故少し前の記憶がないのか混乱している彼を差し置いて彼女は話す。

茂政「…き、君は一体？」

少女「すぐにここから離れて、全てを忘れるんじや。よいな？」

茂政「わ、忘れるつて何を…それに彼女を…あれあの子は一体何で…？」

少女「いいから早く…！」

その先は続かなかつた。何故なら彼女の頭の横を何かが貫いたからである。それが銃弾だと分かつたのは、硝煙の匂いとこちらに向かってくる2人の姿が見えてからであ

る。

黒フード 「まさかこっちに死神がきていたとはな……油断していた！」

亜津子 「こいつがそなうなの……よくも人の顔を殴つてくれたねえ……！」

茂政 「な、何なんですか一体!? それ本物の……!?」

黒フード 「動くな、お前に手荒なことをする気はない。あのお方に捧げる貴重な生贊だからな。」

亞津子「なら、この女は何をしてもいいよね……」

そう言うと亞津子は銃で撃たれ倒れている少女に向かつて思いつきり蹴りを入れる。一発だけでなく何度も何度も蹴つていった。止めようと動こうとする茂政であつたが、黒フードの銃と亞津子から感じる恐怖に体がいうことを聞かなかつた。それから気がすんだのか亞津子は黒フードの元に戻る。

亞津子「：随分あつさりと死んだわね。本当にこいつが死神なの？」

黒フード「死神についての情報が妙なことに少ないからな。まあ頭を撃ち抜かれればどんな生物も死ぬだろう。」

亜津子「それもそうか……じゃあ茂政君行こつか。」

そう言つて振り向く彼女の顔は、目の光が消えていて笑っていた。思わず後ずさりする茂政にゆっくりと近づいて行く。

茂政「う…あ…な、何なんですかあなた達は…？」

亜津子「逃げないでよ茂政君、君は大事な供物だからあんまり傷つけたくないんだよ。大丈夫、君の命は無駄にならないよ。あのお方を喜ばせるなんて名誉なことなんだからさあ。」

黒フード「…面倒だな、もう一度気絶させるか。そのほうが手つ取り早いだろ。」

亜津子「あまり傷が残らないようにしてよ。」

放心する茂政にイラついたのか黒フードが彼に近づこうとした。何もわからないまま自分は死ぬのか…？まだまだ生きていきたい…なのに…こんなところで…？そんな思いが彼の中に渦巻いていた。そして茂政の前に立った黒フードが手に持っている銃のグリップで彼を殴ろうとした。それを見た彼は心の中の思いを呟いた。

茂政 「…誰か…助けて…。」

少女「任せろ、ワシがお前を助ける。」

その一言を聞いた瞬間、黒フードの銃を持つていた手にナイフが刺さっていた。思わず攻撃に銃を落としてしまった黒フードはナイフを投げられたと思われるほうに振り向く。そこには先ほど頭を撃たれたはずの少女が居た。茂政も彼女が倒れるところをしつかり見ていたし、黒フードも亜津子も少女が生きていることに驚いていた。

亜津子「そ、そんな馬鹿な!?なぜ生きているの!?」

黒フード 「確かに頭を撃ち抜いた……何かで防いだようには……!」

少女 「確かに頭を撃ち抜かれたの、今でもあの痛みはよく覚えておる。しかし……。」

そう言つて少女は新しいナイフを取り出し構える。

少女 「あいにく死なない体なものでな。」

か？」

少女「さつきは何度も蹴つてくれたな。やられた分をやり返されると考えなかつたの

そう言うと手が一瞬ぶれた。それがナイフを投げたモーショーンだと気づいたのは、男の頭にナイフが突き刺さつて倒れるのを見たのを確認してからである。スローモーションのように見えたそれが倒れたのを見た亜津子は恐怖に駆り立てられた。死なない体、瞬時に急所に当てる異常な精度、そして何より彼女の眼が本気で殺す眼であつたことである。茂政を置いて逃げようと後ろに向いた瞬間。

亜津子「あ、ゆ、許して、くだ…。」

少女「安心しろ、そんな事も考えなくともいい所に連れてくわい。…行くのは地獄だがな。」

それを聞いた途端亜津子の視界が反転した。それに気づいた時にはコンクリートに頭を叩き付けられていた。

それは一瞬のようで長く感じた。頭から大量の出血をし素人目にも生きていないうとが分かる亜津子と黒フード、死体から抜き取ったナイフの血を布で拭う少女、そしてその光景を間近に感じながらテレビの世界のように感じる茂政だけであった。その光景を見ていた彼は不思議と落ち着いていた。いや落ち着いているよりもどこかデジヤブを感じた。段々と周りが落ち着く中、茂政は過去を思い出していた。

それは彼がこちらに来る前、あの死神事件の日であった。たまたま用事があつて遅い帰りであつた彼は、帰りの途中何者かに今回のように連れ去られたのだ。そして鼻孔を通る鉄臭いにおいに目を開けた彼の目の前には、心臓や頭から血を流している数人の男

たちと、その中に今のようにナイフに着いている血を布で拭っている少女の姿であつた。そこからはまた氣絶したのか意識を失い、気づいた時には自分の家の近くであつた。その時は寝ぼけていたんだと結論付けた、いや付けさせた。あまりにも現実離れし過ぎているのだから。

全てを思い出した茂政に対してもう少し近づいてくる。その時彼はあの噂を思い出していた。上下を黒く染めた服に暗い所に映える白い肌、そして先ほどの戦闘から彼は思つた。

茂政 「あ、あなたは死神…なのか？」

少女 「死神か…それよりもあの時連れ去らわれていたのは、ただの偶然じやなかつたようじや。明らかに君を狙つた犯行だ。」

茂政 「…どういうことですか。」

少女 「奴らの持ち物を見てみたが君の写真と命令を下したと思われる書類があつた。奴らを潰さなければ、お主はずつと狙われ続けることになるだろう。」

茂政 「奴ら？ 狙われる？ もう頭がどうにかなりそうですよ…。」

何故自分がこんなことに？一体どうしてこんなことに？そもそも目の前の少女は一体何者なんだ？人を殺す殺人者？何故彼女たちは殺されたんだ？茂政は今日起こつた色々なことが混ざり合い頭の中でごちゃごちゃになっていた。そんな彼に彼女は道を論す。

少女「…このままではお主の平穏は壊されてしまうだろう。どうする？」のままじゃあ同じことの繰り返しになるぞ。」

茂政「…どうすれば助かるんですか？」

少女「…ワシがお主の助けになる。お主を狙う奴らとワシの追う奴らは同じようじやからな。」

茂政「あなたが…私を？」

少女「そうだ、お主の安全のために、ワシの目的のためにお主をこの命で護ろう。それにお主の潜在魔力も上手く修行すれば、奴らに対抗できる手段になるかも知れないからそこも鍛えておくか。」

茂政は彼女の話を聞き入っていた。彼女を信用していいのか？また騙されるんじやないか？そんな事を思いかけたが、最初に彼女と出会った時の彼女の言葉を思い出した。

『…巻き込んでしまつて済まなかつたの。すべてを忘れ、日常に帰つてくれ。』

記憶の中の曖昧な出来事の中で印象に残つてゐる。あの言葉と本当に申し訳ない気持ちのあの表情を…。そして今もある時と同じ、だけど必ず果たすという強い信念が瞳の奥にあつた。それを見た茂政の答えはもう固まつた。

少女「もう一度聞く。お主の力でワシの目的を果たすために協力してもらう代わりに、ワシがお主を奴らから必ず護ろう。」

茂政「…はい、こちらこそよろしくお願ひします。えっと…。」

少女「零、黒峰零<sup>くろみねれい</sup>という。これからよろしくな、少年。」

茂政「あ、高山茂政です。後私一応大学生なのですが…。」

零「ああ、言い忘れていたがワシはこう見えて60年以上生きてるのでな。年下扱いはあまりしないでくれ。」

茂政「え!? 今何て…!」

零「ほれ、それよりも早く去るぞ。あまり長居する気はないだろう。」

そんな話をしながらもその場を去つていく2人。あのままでいいのかと聞くが、自分が殺つた証拠は残さない術を知っているから大丈夫と返された。先ほどのカミングア

ウトと合わせてあまり深く考えるとまずいと思い、そして茂政は一時考えるのをやめた。

茂政「そういえば零さん、私を護るつて言つてましたがどうするんでしょうか？」

零「決まつておるじやろ、暫らくお主の所に住み込みで生活するしかないじやろ。ワシの荷物は明日にでも必要な物を持つてくるとするかの。」

茂政「え!? それつてもしかして同棲つてやつですか!?」

零「そうなるの、まあこれからよろしく頼むぞ、茂政。」

こうして2人の奇妙な共同生活が始まることになった。茂政を狙い零が追つている  
“奴ら”とは何者なのか？彼女の死なない体の原因は？彼の持つ魔力とは何なのか？  
それは今はまだ分からぬ。ただし一つ分かることがある。

今までの平穏な日常はなくなり、様々な不思議に包まれた非日常が幕を開けたことだけである。